

たより

『美紗の会』 二ニュース

第26号

平成九年十二月十五日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
川 邊 紀 恵

今年をふりかえって

西松布 咏

またたく間に師走の月になり皆様何かとご多忙のことと存じます。

今年も色々お世話になりました。お陰様で心に残る良い年を過ごせたことを深く感謝いたします。まず美紗の会にとつて大きな催しは、十月十二日、十五周年美紗の会のついでございました。

十五年目にして初めてお客様にご披露するとあって、私も会員も心をひとつにしておけいこに励み、お客様からたくさんのご批評をたまわり嬉しくございました。

緊張感の中にもほのほのと楽しい会になったことが美紗の会のあり方をご理解いただけたようで何よりでございます。

パーティでは大倉正之助師による太鼓のお祝いや、ご多忙の中駆けつけて下さった古流松應会千羽理芳御家元の暖

かいお言葉。是非、皆様に聞いていただきたかった田馬平倉氏によるギター演奏。そしてデザイン界の第一人者浅葉克己氏のユーモアあふれる手締め。今思い出しても嬉しく心に残っております。

もう一つは、風薫る新緑の四月二十六日に開催した八芳園での「虹の会」、松岡正剛氏の軽妙洒落なお話を交えて、舞の山村千代恵師と共に雅びな地唄舞の世界を大勢のお客様に楽しんでいただきました。

又、今年海外公演が三つと多忙な年でございました。三月、アメリカコネチカット州のウエスリン大学でのソロコンサートを始めとして、六月、ドイツハンブルグでの地唄舞公演及び邦楽コンサート。十一月初旬は、パリの日仏会館での地唄舞公演。今でもプラボーの声と共に風のような拍手が耳に残っております。

十月十二日青山メトロ会館に於いて「美紗の会」十五周年記念の会が開かれました。発足以来十数年間積み重ねてきたお弟子達の精進の成果を広く皆様に披露する事になったのです。その日が近づくとつれて布咏先生の会への思い入れの強さが私達にもひしひしと伝わってきて、いつもの会以上に「頑張らなくては」という気持ちが強くなり、夏頃から自分なりにいつも以上の練習を重ねてきました。

当日は天候にも恵まれ、会場いっぱいのお客様もお越し下さって、いよいよ開演。会主のお母様の唄や、可愛い新入生、水野陽子ちゃんんの演奏を皮切りに、次々と番組が進んでゆきました。新鋭の方、ベテランの方、それぞれに精一杯の熱演で先生もホッと安堵されたのではないのでしょうか。

自分の出番を忘れてご迷惑をかけた、どこかのおばさんを除けば、皆さんキチンと出番の前に楽屋で待機して滞りなく進んでゆき、最後はゲストの方達の素晴らしい喉で締め切りました。トリは恒例の千寿文師の踊り、今回はお祝儀もの「松の緑」でその舞姿の美しさに一同、酔いしれて閉演となりました。

美紗の会によせて

増田 徳子

は、一同楽しくお料理をとったり、お酒をつぎつこして談笑しているうちに、一部につづく加藤さんの柔らかなムードの名司会でアトラクションが始まりました。ふんわかムードでビールを舐めていた私達に、いきなり心臓がとび出るかと思われ様太鼓(おおかわ)のカーンという音をきかせて下さった大倉正之助さん、次々にはつしと打ち出される鼓の音は、この世のものではない様な身内の痺れる様な感動そのものでした。

つづいてお仲間田馬さんのご主人のギター(タンゴ)のデュオ。私の青春ともいえる懐かしい「ラ・クンパルシータ」の一節、そして最後の「禁じられた遊び」では、あの映画をみた頃の想い出がよみがえって、胸が熱くなる思いでした。そして会長、岡崎さんの「かっぱれ」すっきり板に付いた軽妙な振りには、ますます年季がはいって、一同ヤンヤヤンヤ。そしてお客様のご挨拶がつづき、閉幕ひで女先生がお立ちになりました。日頃、雲の上の方の様に思っていましたのに、そのくだけた気さくなお話しぶりに、

皆さん大感激！会が最高に盛り上がった頃、弟子達一同のささやかなお祝を贈呈しましたが、受け取ってご挨拶される先生の眼にキラリと光るものを感じ、その晴れ姿に思わず拍子を送った至福の一刻でした。

やがて宴も終る頃は「美紗の会」のジंकクス通り、小雨が降り出して「宴のあとの淋しさ」を地で行った様な帰路でした。私は偶然ひで女先生とごいっしょになりましたが、先生は何度も「私は布咏さんが好きなのよ」と御言っていました。きっと布咏先生の芸もお人柄もよく理解して下さっているのでしょう。よき理解者や後援者に守られて、先生がますます活躍の場をひろげられます様、又やがて来る二十周年の会に向かつて、皆様と共に頑張ってくださいと思います。

来年の予定

- 一月九日 外人記者クラブ新年会 萬才・ゆき 地方演奏
- 一月二十三日 日立シビックセンター 天球劇場
- 江戸の宇宙はミステリアス よみがえる浮世絵の世界
- お話 ジョン・ソルト
- 唄・三味線 西松布咏
- 二月八日 美紗の会 おひきぞめ 浅草「細井」二階

パリ公演の思い出

西松布咏

パリは、前に一度訪れたことがある。ひよんなことから知り合った友、マルガリータが住むモンパルナスの古いアパートで一週間程過ごした。

パントマイムをする彼女は、色々な芸術家を知っており、ある晩サンジェルマンにある友人のスタジオを借り、私のコンサートを開いてくれた。小さなろうそくを床に置き、じゅうたんにちよこんと座り、私は彼女の司会を頼りに、小唄や端唄を夢中で唄った。その後のパーティが忘れられない。色々な人種の人達が私の唄に酔い、ワインに酔い、ひとつになった感動のひとつときだった。あれから十一年が過ぎたのだ。

そんな遠い昔は、忘却のあなたのようにあり、昨日のことだったかのように鮮やかによみがえるようでもある花のバリ。

シャルルドゴール空港に着いたのは小雨の降る夕暮れだった。シャトルバスの窓は、雨のヴェールで一層幻想的に下町のにぎわいや、ピガール広場のネオンを飛ぶように映してゆく。やがてエリゼ宮殿が浮かび上がり、シャンゼリゼ通りを過ぎ、エッフェル塔が大きく見えたかと思うと、

今回の滞在宿・ニッコードパりに着いた。

その晩は、ホテル近くのピストロ口で夕食。愛想の良い蝶ネクタイのウェイターに勧められた、たつぷりの肉と野菜の熟々のポトフ、生ハム、シーフードサラダ、そして陶器のピッチャーに入った赤ワインで、公演の成功を祈って乾杯！

隣の席には親子ほどの年違う男女のカップルが、瞳を見つめて合せて食事をしている。年の頃は七十過ぎの老人ではあるが、小粋な指輪をキラリと光らせて若い女の夢中なおしゃべりを、ウィ・ウィと優しく聞いている光景はまるで映画の一シーンだった。

翌日は、五時からリハーサルの為会場へ。ホテルからセーヌ川沿いに歩いて十五分程のところの日仏文化会館はそびえ建っている。

地上五階地下五階のカープしている総ガラス張り、エレベーターのベルトもむき出しのスケスケ建物。眺望の良い窓からセーヌ川が見渡せ、エッフェル塔の建つ公園は、黄金色に染まっていた。

折しも二階では、日本ボスターデザイン展の開催中で、日比野光希子さんのお兄さん

や、美紗の会にいらして下さった浅葉克己氏の作品も出品され、力作ばかりであったが、中でも印象的だったのは、画面いっぱいフランスパンの真中に、梅干しがちよこんと一つ載っている斎藤真氏の作品で、日仏の友好をシンブルに表現していたように思う。

一階の入口で、人だかりがしているので何事かと思つたら、プリントクラブが数台置いてあるのがその原因と知り、パリっ子達にも人気のブリクラ現象に思わず苦笑してしまつた。

十一月六日から三日間の地唄無公演は、バリフェスティバル・ドートンヌの一環で、今年日本を迎え、能・文楽・歌舞伎なども予定され、チケットは三週間前に売り切れたという。

そしていよいよ初日。八時半から始まるので、六時には楽屋入り、準備をととのえ、舞台裏での待ち時間が最もつらい緊張の瞬間——時刻になつても客が入ってくるので、なかなか幕があがらず十五分遅れで開始した時は、満員の盛況であった。

プログラムは、閑崎ひで女・清女師による、残月・菊の露・鉄輪・雪。地方は、唄

と三絃・西松布咏、琴・胡弓、小原清歌。

秋の催しなので渋い演目が選ばれ、低音から始まる残月は、月によせて亡き人をしてのぶといった重い曲であるが、水を打ったように静かな会場に、静寂の美がくつきりと表現されたようで、最後の「雪」が終わったあとは、われるような拍手で、われわれ地方にも暖かい拍手をいただいた、四曲唄い終えた疲れも感じない程嬉しかった。

終演後、観客とのレセプション会場に行きシャンペンで談笑。今回の火付役である親日家のジョン・カルマン氏は、四百人もの観客を収容する会場なのに、マイクなしでも良く声が響いて素晴らしかったと、にこやかに話して下さった。最終日の八日は、清女さんのご主人堤清二氏がわれわれ一行を昼食に招待して下さった。会場に近い中華レストランで、ワインを飲みワイワイおしゃべりしながらお腹いっぱいになる。

こんな時は、夜にひかえている舞台がうらめしくなる。八日は最終日とあって以前にも増して多勢のお客様。二階席までいっぱいになり、舞台のすそで待っている私達は、上からのぞかれ、どこに身を置いたら良いか——と嬉しい悲鳴。

最終日もお客様の反応はとても良かった。私もこれで緊張感から開放されるといった喜びと三日間、この素晴らし

い会場の舞台を務められたという思いで、砂浜に波が押し寄せてくるような感動を覚えながら懸命に演奏した。雪を舞い終えたひで女先生が、ていねいにおじぎをすると、まさに嵐のような拍手、その拍手を聞きながら舞台を降りた瞬間は、感無量だった。そばにいる誰にでも抱きつきたい程に……。

実を言うと二日目の朝、急性胃炎をおこし、なんとパリの医者に往診に来てもらったのだ。芸術家のような風情の初老の先生は眼鏡ごしに、音楽のようなフランス語の合い間に、お腹に手を当てて、痛い？大丈夫？と日本語で話してくれ、最後に、夜公演に出るのなら、座薬か注射のどちらかを選べとおっしゃる。

私は一瞬、シエイクスピアのツービーオアノットツービーを思い出して、どちらか嫌だと思つたが、即効性のある注射をしぶしぶ選んだ。そしてなんと何十年ぶりかで、おしりに針をさされたのである。花のバリで、ロマンチックな出逢いを夢見ていた私なのに……。

興奮さめやらぬ公演後の深夜、こんどのパリの思い出は、なんと花のバリではなくて針のバリになってしまったと、エッフェル塔のネオンを眺めながらおしりのチクリを又思い出した。

今年もあとわずかです。美紗の会にとつては、15周年という大きな節目の年でもありました。一口に15年といつても、継続するのは大変なこと。師匠の御努力あつてのことだと思ひます。その他、虹の会の開催、アメリカ・ドイツ・パリ公演など、相変わらずのご活躍でした。この「たより」も会員の皆様のご協力のお陰で、26号まで数を重ねることになりました。

編集後記

今年もあとわずかです。美紗の会にとつては、15周年という大きな節目の年でもありました。一口に15年といつても、継続するのは大変なこと。師匠の御努力あつてのことだと思ひます。その他、虹の会の開催、アメリカ・ドイツ・パリ公演など、相変わらずのご活躍でした。この「たより」も会員の皆様のご協力のお陰で、26号まで数を重ねることになりました。

いつも、何か記事がないかしらと考えたり、発行日が迫ってくると、あわてたり、原稿に誤字がないかしらと、馴れない辞書を引いてみたり、なかなか、ドキドキする仕事です。でも、皆様に読んでいますよ。と、暖かい言葉をかけて頂くと、苦勞が喜びになります。

どうぞ又、来年もよろしく
お願い致します。
川邊紀恵

